

小田 俊夫（おだ・としお）

1、プロフィール

詩人として多くの同人誌（自らも発行）に作品を残しているが、作品は童謡や民謡に分類されることが多い。作曲家中山晋平との「花まつり」が知られている。

<生没>

1904(明治 37)年6月 27 日～1980(昭和 55)年7月 16 日

<代表作>

童謡詩集『栗鼠の顔が見たかった』

作曲家中山晋平と組んだ童謡『花まつり』・『お花見手鞠唄』

作曲家河村光陽と組んだ童謡『月夜』・『春ほうほう』

<青森との関わり>

昭和 20 年9月、病弱の身体の療養のため、妻の郷里である大間町に移り住み、昭和 55 年7月の没まで在住する。

2、作家解説

明治 37 年、香川県仲多度郡琴平町に、長男として生まれる。父の仕事上、幼少年期は移住を余儀なくされ、中学1年は韓国の金城中学校（現在のソウル）で迎え、2学期から東京の早稲田中学校へ転校している。同期にサトウ・ハチロー、古川ロッパらがいた。早稲田中学校卒業後、法政大学専門部国語漢語科に進み、そこを卒業後、奉天（現在の中国）、東京、大阪で会社勤めをする。

その間、大正 15 年から「地上楽園」の同人となり、昭和7年の通巻 66 号まで、間断なく作品を発表する。並行して同人誌「蛍の光」・「よりきり」・「童謡祭」・「童謡詩人」・「鶴（ぼん）」・「ゆりかご」・「青窓」・「チチノキ」・「BAN」・「バン」・「銀の泉」・「童謡研究」等へ多くの作品を発表する。

自身の作品集としては、小編として『春風ほうほう』・『ぼっかぼっか』がある。童謡詩集は、大正 15 年発行の『栗鼠の顔が見たかった』（大地社）がある。

他に、「登志夫作品集(第一巻)短歌集『春ひらけたる日』」(発行日不詳)、「登志夫作品集(第二巻)短歌集『麦また稔れり』」(発行日不詳)、随筆集「向山荘雑記」(発行日不詳)がある。

昭和 20 年9月、病弱の身体の療養のため、妻の郷里である大間町に移り住む。大間町では、農業組合や郵便局に勤務する。大間町に移り住んでからも童謡を中心に創作に専念し、多くの詩、短歌、俳句等を残した。町の方々からは、「現代の良寛さん」と慕われ、静かで子どもの好きな人であった。

昭和 62 年頃には、小田俊夫作の童謡詩に、地元の小中学校音楽教師や音楽教室の先生が曲をつけるなどの交流も生まれた。

昭和 55 年7月、大間町で没している。享年 77 歳であった。

3、資料紹介

○『栗鼠の顔が見たかつた』

図書

1926(大正 15)年6月 15 日

190 mm × 130 mm

巻末の「童話集の後に」で小さい頃からの物を集める癖から童話集が出来上がったようなもの、最近の作品の発想は「やあ！」と感じたことをそのまま童謡にしていると述べる。また、子ども達には、お話や童謡がご飯のように大切だと創作意欲を示す。